

ような場所とするため、内装に留意したこと。

- ・電話での予約受付が原則ではあるが、要望に対しては迅速に対応すべく、臨時の相談日を設けたりして柔軟に取り扱っていること。
- ・行政が実施していることで有利な点、例えば、立場の中立性・費用は無料など、を最大限生かしていること。
- ・医療機関ではなく、あくまでも相談室である点を前面に打出し、病気のイメージを払拭していること。

ここ数年間の実施実績の中で、目立った点をみてもと：

- ・相談対象者における女性の増加。特に40歳代において著しい。
- ・相談対象者を年齢別、男女別にみると、男性では20歳代、女性では40歳代にそれぞれのピークが認められる。
- ・相談内容は、心身不調の訴え、職場での人間関係、配転・転職・出向などが目立つ。
- ・予約の電話は自宅から掛ってくるものが殆んどであり、しかも多くは女性が申し込んでくる。
- ・個人ばかりでなく、企業や職場からの問い合わせもみられる。

なお、当相談室ではこれまでの実績をふまえ、「働く人のメンタルヘルス事例集」を発行したりして、心の健康についての啓発にも努めている。

5) 経過中に軽躁状態を呈した逃避型抑うつ の1例

福島 昇・田中 敏恒 (新潟大学精神医学)
飯田 眞 (教室)

エリートサラリーマンに見られた抑制が主体の逃避的色彩の強い抑うつ状態に対して、広瀬は「逃避型抑うつ」という概念を提唱し、その特徴として次のことを挙げた。物質的にも知的にも恵まれて育ち、葛藤の少ない生活史を送るため他人を押しつけて上に行きたいという欲望が乏しくなるが、一方で努力無しに対面を保ちたいという願望が強く存在する。発病は仕事の変化を契機とし、病像は抑制を主体とし、蒸発などの逃避規制が目立つ。そして病棟内では規範的な患者として振る舞う、などである。今回の症例は38歳男性で生活歴では一流高校を卒業後、一流私立大学に進み卒業後は地元の大手銀行に就職した。現病歴では、1983年春の父親の死、配置転換をきっかけとして抑うつ気分や意欲減退が出現し、そして

同年7月に失踪し11月末に発見された。その後、一時的に気分が高揚し教師を志したが手続きミスから断念し、それ以来、抑うつになった。1984年6月(29歳)再就職先に馴染めずにさらに落ち込むようになり再び失踪し、同年7月秋田にて保護された。N大学精神科を初診し、そのまま入院した。入院時は抑制が強く見られたが、抑うつ症状は徐々に改善し9月25日に退院した。1985年2月(29歳)現在の会社に就職し、その後は特に問題なく過ごしていたが、1992年6月(37歳)会社で部署の移動があり、同年10月頃から気分の高まりを感じ始めた。1993年1月第2子が生まれた。子供の命名をめぐる争いで夫婦関係が悪化した。その後6月まで気分がさらに高揚し、対人関係のトラブルが頻発した。また多弁、易怒性が見られ、金遣いも荒く、睡眠時間も減少した。そして同年7月頃(38歳)から気分が落ち込み始め、仕事のミスをきっかけに3日間会社を無断欠勤し、O病院心療内科を受診した。この時、躁うつ病の診断にて薬物治療を受けたが一ヶ月で通院を止めてしまった。復職した時には会社は業績不振のため仕事が無い状態で、通勤を辛く感じ始めた。そして12月13日会社に行くと言って家を出て、そのまま失踪した。失踪中、何度か自殺を考えたが結局、試みる事はなく12月25日に帰宅した。しかし既に妻子は実家に帰っていた。自分は無駄な人間であると考えてO病院で処方された薬物を大量服用し自殺を図った。同月29日自宅を訪れた母親に発見され1月4日N大学精神科を再受診し即日、入院した。入院時所見では軽い抑うつ気分と不安感がみとめられたが、礼儀正しく問題行動は見られなかった。本症例は「逃避型抑うつ」の概念を満たすものと考えられるが、特徴的と言えるのは、軽躁状態を示す時期が存在したことである。このことは、かつて単極性うつ病と退却性うつ病の中間的な病態として考えられた逃避型抑うつが、うつ病相には逃避機制を有しながら、躁病相を伴ううつ病へと変化する症例が存在することを示していると考えられる。今後、症例を積み重ねて、逃避型抑うつの意味を検討してきたい。

6) 一卵性双生児の精神分裂病不一致例

齋藤 功・佐藤 新 (新潟大学精神医学)
七里 佳代・飯田 眞 (教室)

発端者が就職後に幻覚妄想状態を呈した一卵性双生児の精神分裂病不一致例について報告した。症例は24歳の男性で、発症したのは兄(A)のほうである。弟(B)